
特徴特化魔術師

Raja & Y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

特徴特化魔術師

【Nコード】

N7057Z

【作者名】

R a j a & Y

【あらすじ】

世界から化け物と呼ばれた一人の青年「神路魔 黒己」が『魔法』を学ぶ物語。

彼が自身生まれつきの『特徴』のせいで化け物扱いをされてきたにも関わらず人と向き合いながら成長していく物語。

今現在の世界の生活に普及している『魔法』をどういう風に捕らえてどう活かすか。彼自身が生み出した答えは果たして世界をどう動かすのか……。政府はそれをどういう風に対応するのか。

さあ、世界を変える魔法の物語を始めましょう。

第0章 第1／2部それぞれの行動 家族編（前書き）

この物語には厨二病表現が含まれています。厨二病に対するアレルギーを持つ方はブラウザーバックを直ちにクリックし、他の小説をお読みになつてください

第0章 第1/2部それぞれの行動 家族編

「あづい・・・」

俺は汗を手の甲でぬぐい呟く。手の甲でいくら拭おうが汗は止まるわけでもなく、アスファルトにたれ落ちる。

着ているYシャツがすでに肌に張り付く程になっていた。絞ったらどうなるのだろうか・・・と、どうでもいいことが頭をよぎる

俺、神路魔 黒己は真夏の真昼間の中、海や川ではしゃぐわけでもなく、

アイスや冷房の効いた屋内でくつろぐわけでも無く、目的地に向けて太陽で熱された熱いアスファルトを踏みしめて歩いていた。

かれこれ4時間ほど飲まず食わずで歩いてきたせい、目の前がぼやける。

熱い、もう暑いじゃなくて熱い。自然サウナとはよくいったものだね、本当。がっちりとした長袖のスーツ（黒色なのできっちり保温します）を着ているせいでもあるんだけど。自覚はしている。

何故このような真夏日和に街をスーツ姿で出歩かなきゃならんのだ！と叫んでも街中の人々に白い目をされるだけで何も

おこらないのはわかりきっているのでやめておく。

「ゲ、限界・・・あんのクソ親父・・・」

俺はスーツを脱ぐと首にかけてあった十字架形ネックレスをつないでいた鎖ごと引きちぎる。後頭部に衝撃が走ったが痛みは感じなかった。

その代わりに身体にあった空腹感とある程度の意識を取り戻す。

「ああ、生き返る・・・あとで新しい鎖を買わないとな・・・その前に学園の寮に行かないとな・・・というか今思ったら普通に休めばよかった・・・」

俺は後悔しながら渋々十字架のネックレスをスーツの上着ポケットに突っ込み歩き出す。さて、後何分つくでしょうね？と俺はスツ

キリした頭の中で自問自答した。

「ふざけないください！！！！」

少女は大声で怒鳴り机を両手で力任せに叩く。声と音は部屋にとどまらず隣接している廊下にまで響いていた。

夏休み真っ最中の学園に在校生の4割の生徒が教室やら食堂やら訓練場やらで自分のやるべきことをやっていた。その中にいきなりの怒鳴り声が割って入ったのでなにがあつたのかとその怒鳴り声の発生源、校長室の前に大勢の生徒が集まっていた。

「凜はなにに怒ってるか知らんが、親に向かって怒鳴り上げるたあお前もやるようになったあ？」

校長室はお世辞ありでも綺麗という言葉がでないほど書類で満たされていた。ただ、机や椅子、棚やそこにある本などは高価なもので満たされていた。

「そんなことはどうでもいいんです！！それより何故あの兄さんがAクラスじゃないんですか！？体術、魔法、魔術、精霊術医術その他多数！明らかに私より15分に長けている兄さんが編入と聞いてぬか喜びした私がバカでした！」

少女がもう一度机を叩くと、上に載っていた書類が床に舞うように落ちていった。少女はソレを気にせず机を前に座っている男を睨む。男は困ったように後頭部あたりを掻く。少女が怒っていることに対してじゃない、書類が滅茶苦茶になっていることに困っていた。

「お前なあ、書類どうしてくれんだ？・・・まあ、とりあえず先に言うておく。あいつはあいつなりに考えて結果をだした。確かに、あいつの実力、知識、道徳などを掛け合わせてもこの学園の五本指に入る事は確実だろうな。だがな、あいつは俺の申し出を断ったんだよ、何故だかわかるか？」

男は落ち着いて話ながら手が届く範囲で書類を拾い上げる。

「ッ！・・・いえ」

少女は自分の考えとまったく違う回答をされたので顔を瞬間的に強張らせた

「あいつはな、自分を化け物だと認識してるんだよ。実際、俺の遺伝子を綺麗に受け継いだしな。そのせいか、事情の知らない奴らには人間としてではなく化け物としか映ってなかったらしいな。小さいころからのトラウマもあってか人に対して魔法を使うことができなくなっている。だから優秀なAではなく主に体術面を鍛えるEクラスに移させてもらった」

男は少し威圧のかかった声で少女に言い分を聞かせる。少女は悔しそうに顔を強張らした。

「お前は何か勘違いをしてるかしらんが、俺は俺なりの考えを持ってEクラスに編入させた」

「・・・なんですかそれは」

少女は怒りを抑えながらも不機嫌声で男に返答した

「あいつは特化魔学科に編入させておいた。まあ、特例という処置をとらなきゃいけなかったがな。実質いま体術の面でも魔法の面でも一番レベルの高い特化Eクラスにだ。成績だけの連中の所に黒己置いといたら死人でるぞ、死人。という訳で入れた。というか、入れるしかなかった。あいつの学園内の居場所はあそこしかないしな」男は大口を開けて笑いながら答える。少女はその表情に釣られて口を緩めた。

少女からは怒りの感情はなくなっていた。

「さて・・・少し長くなったな。生徒会長神路魔凜、書類の片付け手伝ってもらう。自分の始末は自分で片付ける」

「ハイ！」

神路魔凜は上機嫌になりながら返事をし、父親の仕事の手伝いを始めた。

校長室で聞いていた生徒達がこのことに関して噂をして事件が起こ

ろうとはこの時は誰も予想だにできなかった。

今日、地方観測上最も気温の高い36度を記録した猛暑の中。分厚い鉄を使用したプレートアーマを着込み、腰に細身の剣を携えた者、『騎士団員』が街中を歩いていた。基本的に各都市に対して20人規模で活動する騎士団はいまこの都市タリスには50人という規格外の多さで配置されている。少ないように聞こえるが、騎士団員一人一人が都市の全軍隊に全力で攻撃を仕掛けられても正面から応戦して5時間は耐え抜けると言うそれまた規格外の強さがあった。昔は化け物扱いをされていたにもかかわらず、今では世界の人々の中ではヒーロー的存在になっていた。

その騎士団員総計50人が気を張って街中を警備してるということは世界の歴史を塗り替えるほどの出来事が起こることを予測されていた。

騎士団員は夏のせいでもあるがほとんどは緊張からの冷や汗にまみれていた。

「.....くそ」

朝が過ぎ、夜を迎えた都市タリスの中、一人の騎士団の鎧を着けた少し暗い金髪の青年が誰にも聞こえないように言葉を発する。顔は悔しさで歪み、人相の悪い目をしていることが青年自身でもわかっていて。それでいて直そうとも思っただけでなかった。

青年の名前は神路魔 零。現17歳の若さから世界最高の戦力を持つ騎士団の中の隊長を務める。その神がかった才能と誰に対しての慈悲の深さ、正義感から彼は『Knights defender』

goddess（女神を守る騎士）』とたたえ上げられているが彼自身そのことに対して無関心ではある。

それほどまでに呼ばれている彼も人間であり、悔しいという心も人並みに持ち合わせている。

しかし、彼はそれを表に出すことはなかった。「それではまるで心がない女神を守る人形じゃないか」と戦友にも言われたことがある。冗談であることは彼自身でもわかっていた。

それがまるで嘘のように彼は顔を悔しさで歪ませた。理由はただ一つ、彼が今最も尊敬する人物が学園に通うことになり、ただの高校生に成り下がったとことと、その学園の中で最もランクの低い地位に着かされた、と昨日実の妹から連絡があったのだ。

彼の尊敬する人物は、彼が知っている限りでは誰よりも優しく賢明で、それでいて全ての力という項目での強さがあった。

その人物が通わなければならぬというわけでもない学園に無理やり編入され、しかも地位が一番の格下だというのだ。彼にとっては信じがたいことであり、許しがたいものであった。

零はそんな尊敬する人物を2日間掛けて探しているのにも関わらず今だ一度も接触がなかった。

都市全体を探したわけでもなかったが、他の団員達も今現在搜索中で、その団員達からも期間中その類の連絡を受けとらなかった。

零の私事で動いているように思えるが、彼の尊敬する人物を探せという命令は彼自身から出されたのではなく、彼の所属する騎士団のトップに君臨する『総団長』から直々に命令が下ったのだ。いままででただの人探しだけでは総団長直々に命令が下るのは決してなかった。だがしかし、その命令が下ったということはその人物が騎士団にとって脅威、あるいは

力になりかねない者であると同時に、世界にとって必ず必要な要であるのは違いがないと騎士団員のほとんどが考えていた。

それゆえ誰も手の抜けない状態が何日も続いている。

その人物は先程の妹からの情報によれば偶々零達の暮らしている都

市タリスにある魔法総合学園メシアに3日前に編入されたという。できすぎた話で彼は驚かずにはいらなかった。そういう経由から悔しい顔もすれば心では少し嬉しいと感じてる。零自身の嬉しさの原因は尊敬する人物、『神路魔黒己』は人間の皮をかぶった化け物だと世界の眼には映っていたにもかかわらず学園という極々普通の場所に転入できたのは本当に良かったと思っけるところから出ていた。

そんな心境を持ちながらも『女神を守る騎士』は今夜も夜の都市を隙間なく練り歩いていた。

第0章 第2/2部くそれぞれの行動 世界編く

過去に遡り西暦2103年8月28日、現代に受け継がれるこの日を『魔学世界革命』と名付けられた。

夏の猛暑が度重なる中、世界が着々と変化を遂げているとは知らずに、世界各国を治める者達が集まって会議をしていた。

会議事態は別段と珍しくはないわけでもないが今回の会議は何処か空気が違うというのを集まったもの全員が錯覚がした。

会議が行われている場所は現在でいう魔法都市タリスにある騎士団本部の会議室で行われていた。

別段広いというわけでもなく、狭いというわけでもない。しかし、中で話されている内容はどんなことがあるうとも外に漏れることは決してなかった。というのは西暦2103年の技術で最も防音に優れている素材をふんだんに利用し、もし外部から攻撃を受けた場合には騎士達による徹底的な排除が待っている。この場所で誰かを襲うというバカなマネをしようとした者は全くといっていいほどいなかった。

盗聴器などの対策はこの部屋に足を踏み入れた瞬間、機械類は全て監視カメラから発せられる電磁波による特定が行われその類の行為が見つかった際には先と同じ騎士達による排除が待っている。

という様々な理由があるため少人数で話し合いをするならばここが一番の安全な場所だった。

会議室には長方形の机を口形に並べ、そこに椅子を置くという簡単なものだった。

椅子に腰掛けているもの達は男女計8人、若くて50代後半、最も年齢の高いものは85歳という高年齢層が集まっていた。

「さて、そろそろ決断して欲しいのですが、ベルエス殿」
沈黙が続いていた会議室に老いた声が響き渡る。発言者は世界から見て北部にある大陸の中心国『パレス』の国王からなるものだ。ベルナスと呼ばれたものが顎に手を沿え神妙な顔で考えをまとめ、手元においてある紙の束をもう一度拾い上げそれに基づき思考して発言をする。

「わかりました、パレス老人。わが国で『クラフィス』の普及を試みましょう。ただし、軍費及び障害賠償などはアナタ達国々で出費していただくことになりませんがよろしいですか？」
ベルナスが喋り終わると小さな拍手が起こる。それは同時に全ての国と国が交渉条件を認めるという意味につながり、そこで今回の会議が終わった。

西暦2103年、世界は資源の底が見え始めているのを今更ながらも認めていた。石炭や木炭、石油などの化石燃料や水などが文字通り近年には枯れ果てて無くなるという事態に迫っていた。そこで、新たな資源がないかどうかすべての分野で試行錯誤した結果、『クラフィス』現代では『魔力』や『魔質』と呼ばれる物を利用した『資源再生』が有力だと考えられた。

『クラフィス』は目視できない。色もなく匂いもない。なら何故人間はこの『クラフィス』を確認できその資源再生が可能になったか、その理由には一人の東部出身の男『上島 勝義』という人物の影があった。

世界がまだ『魔学』ではなく『科学』が普及していた2101年、当時35歳の勝義がまだ無名で、東部の田舎町で研究を続けていた。彼は妻子供は居なく、単身の身で苦勞していたある日のこと、彼が持つ田舎町の隅にある研究所で今までに無い物を眼にすることになる。彼が見たものは一匹の『虫』だった。

その『虫』今までに無い形状をしていた。普通の虫にたとえるなら蜘蛛に似ていた。しかし、足の本数、頭部となる場所の数、なによりその蜘蛛のような虫から出される糸が他の蜘蛛とは違い不可解だった。

色は普通の蜘蛛と同じだが、強度、他の物質による反応およびそこからなる変化。

その変化とは接触した物質とは全く違う形質に『変質』させるといふものだった。

勝義はその反応を『Sorcery Change（魔法のような変化）』SCと名付けた。

その蜘蛛の糸からなるSCは世界を驚愕させる物となる。

勝義が一番にやった実験は、糸を水に浸してみることだった。結果、水は炭素、硫黄化合物、窒素化合物、金属類も含まれている

石油へと変化させた。その石油は本来の石油が燃焼するときが発生する有毒なガスを全く排出しなかった。

次に勝義が実験したのは糸が植物に閉じた場合である。対象物はコケ植物、シダ植物、種子植物の陸上植物、

マツバウミジグサ、リュウキュウスガモの海草を使用した。

関与の仕方は葉に0.1mの糸を貼り付け2時間ほど空気に触れさせないで放置するというもの。

結果、全ては異なるものに変質していた。コケ植物は形を残したまま質量そのまままで銅に変質し、シダ植物は形こそ無いものの質量はその

ままで二酸化炭素に、シユシ植物は入っていた袋に穴が開いて燃え

後があるところからいることから可燃物に、海草の二つを入れていた袋からは純度100%の金粉と銀粉が取り出された。

勝義はそれらのSCの性質と公式をもとめ1年間更なる研究を重ねた。

そして2102年9月25日、勝義はある実験で無名から有名な研究者になる。それは、人体実験だった。

勝義は人体実験をやることを前提にネズミ、猫、犬、カエル、魚などの動物実験を重ね、ある公式が生まれた。

それが後に伝わる『魔法』『魔術』だった。

動物実験結果に対して共通の反応が見られた。それはシックスセンスの覚醒と知能の向上である。

凶暴だった犬は人の言葉を理解し、猫はその場で二足歩行を行い、ネズミの場合は数式を理解し解くという物となった。

そして、魚類、カエルに入れた場合。カエル、及び魚類は糸を関与させる前と同様のエサをやっても食べなくなり、代わりに

何も無いところから何かを食べるような動作をしていた。実際、カエルと魚類には何も与えずに3ヶ月放置したが

全くもって栄養に関する健康上には問題が無かった。しかし、魚類とカエルの胃の中には解体しても何も発見できなかった。

勝義は仮説を立てた。「もしかすると糸に含まれる形質を変化させる何かが常に空气中に発生しているのでは」と。

そして「糸を関与させたカエルと魚類は『ソレ』を目視し、触ることも操作することもできるのではないのか」とも。

それらの経路から勝義は自分に対しての人体実験を行った。2m程の糸を20ccの血液とまぜ、その血液を反応が起こる前に

自分の体内に戻した。結果は何も起こらなかった、と思われたその2時間後に勝義の視界

から今までに無かったものが写しだされる。それは何も無い空間からなる歪だった。

ソレこそが現代の『魔力』や『魔質』、世界初めての『クラフィス』の発見だった。

そして、ソレを操作し、自分自身および他の物質に影響を与える方法を勝義は『魔法』『魔術』と呼んだ。

その研究成果及びその論文をまとめたものを東部の国家に提出し、国家とその国の研究者はそれを1ヶ月間掛けて受け入れた。

そして『魔学世界革命』が起きた。『クラフィス』の影響力は異常なスピードで広がっていった。

ベルナスが国家会議を終え、勝義と合流し、一時間後早速1tの銅を全て石炭に変えるれるかと頼むと勝義はコンマ1秒でそれを成し遂げた。

ベルナスは夢でも見ているかのようなだった。しかもその石炭を燃焼させたところ有害な物質が含まれるガスが排出されることが

無かった。燃えてできた煙は無臭無色そもそも煙が出ていた事を実証することができなかった。しかし熱エネルギーは普通に出ている事から資源に利用できることを確認させられた。

『魔学世界革命』は資源と同時に世界の環境問題を解決させた。

勝義はその後研究に明け暮れ、西暦2131年65歳彼は未練なく笑顔を浮かべながら死去。

彼の意思と子孫は以後神路魔として受け継がれていくことになった。

そして現在西暦2259年8月28日『魔学世界革命』から156年後の今、世界は不穏な空気に包まれていた。

北部のレイナス大陸、西部のデクレブ大陸が連合を組み、RD北西連合ができあがった。

そして魔法都市タリスがある中部のハレナス大陸と東部のメキリス

大陸の連合、T H 中東連合ができ。南部のハワレク大陸が孤立状態にある。

世界はこの3勢力、R D 北西連合、T H 中東連合、南部の孤立勢力によって戦争を繰り返し、その主な戦力『騎士団』『魔法師』を中心に

この物語が始まったのであった。

第0章 第2 / 2部 それぞれの行動 世界編 (後書き)

- - -
- - -
- - -

魔法の初めての発見、現在の世界の勢力を書かせていただきました。少し無理やりな感じですが、第0章完結です。

一樣やつのことの本編に入ります。長い説明文を考えるのはあまり得意ではなかったので、やっと好きなようにできるといふ気持ちがあります。感想、指摘など書いていただけるとありがたいと思います。

次回予告

0章で書いた魔法を惜しみ無く使います。

第1章第1 / 15部 小さな野望と優しき魔術師

- - -
- - -
- - -

第1章 第1／15部～小さき野望と優しい魔術師1～（前書き）

長くなるので第1部を2分割させていただきました。

この物語には厨二病成分が含まれて降ります。アレルギーまたは拒否反応が起こる方はブラウザバックをクリックし、他の小説をお読みになられてください

第1章 第1 / 15部 小さな野望と優しい魔術師1

戦争というのは突然起こり無関係な人を巻き込むものだ。極々当たり前のことだが目の前で目撃してしまえば流石に止めないわけにもいかないだろ。

正直厄介ことはあまり好きではない。だけど無意味に消えていい命なんてものはどこにも無い。

たとえ俺、神路魔 黒己に対して『化け物』と批判しようが、過去に他人を悲しませた奴だろうが関係ない。

別に全て守ろうってわけでもない。ただ目の前で消えていかれるのが不愉快なだけだ。

だから今目の前で起きている物事に関して俺は怒りを覚えている。

騎士団が今更ながら金属製のプレートを鳴らしながら前線に走ってきているが、無残に殺された人が生き返るわけでもない。

ある人は両腕を切られてその場で失血死したり、ある人は首を切り裂かれ窒息死だ。目の前で血の海が広がっている。

不愉快だ。怒りなんてもはや通り越して呆れている。血の臭いが鼻を刺激する。他の国の騎士団がいつの間にか俺を囲み剣を向けている。

「死ねええええ!!」

一人の騎士が俺に向かって剣を振るう。左腕が跳ねられたが別に痛みや恐怖は襲ってこなかった。切り口から血があふれだすがすぐに止まり傷口を皮膚が覆った。とんだ化け物だ、俺は。

また2時間もすれば新しい腕が生えて要るのだろう。

騎士は顔を怒りに染めまた剣を振るう。右腕が地面に鈍い音を立てて落ちる。そして切り口から血が噴出したかと思えばまたそれを皮膚が止める。

俺は笑った。血が服を赤く染めているのを気にせずに。

俺は祈った。無様に殺された人たちのために。

俺は怒った。この状況を作った奴を。

俺は泣いた。この世界に対して。

そして騎士は再び剣を振るう。次は首だろっ、そう直感した俺は脚を曲げ体を下げ刃を避ける。

剣が頭を掠める。そろそろ俺は行かないと行けない。こんな『化け物』な俺ができることは、こいつらに指示を仰いでいる国の権力者の説得、最低の場合この世の中から消さなければならぬ。しかしその前に騎士達をどかさないとイケない。

俺は頭で想像した、目の前の騎士が全て倒れているのを。そして『創造』した。俺を囲んでいた騎士達は地面に倒れこんだ。

息はあるが恐らく、味方の騎士達が止めを刺すだろっ。だが俺は行かなければならない。このばかげた戦争を止めるために。

俺は走った。無い腕を振りながら。体に銃弾と刃が突き刺さるのを無視しながら。

戦争は当然に起こった。綺麗な街が破壊されていった。さっきまで人が楽しそうに騒いでいたこの街を。

人の声が喜びにあふれていたこの街は今悲しみ声に変貌していた。だから俺は走ったこんなちっぽけな世界の一部を救うために。

自分の手が血に染まる。人を殺す度に快感を覚えてくるようになった。

俺は『道具』としてこの戦争に送られてきた。兵隊のように銃なんぞ物を持たずに、騎士のように剣を持たずに。

だけど俺には武器がある。『魔術』だ。頭で想像するだけで人を壊せる武器。

動かなくていい、想像するだけだった。それだけで、何も無いところから殺傷できる何かが生まれる。

「ウツ・・・オエエ」

俺は恐怖のあまり嘔吐した。頭がズキズキと痛むがやがてそれも快感になる。

世界が崩れていく想像をした。ガラスのように砕けていく世界を俺

は嘲笑った。

砕けた後に残ったのは暗闇だった。

やがて暗闇に包まれるこの世界に閃光が走る。

そして俺は目を覚ました。

太陽がカーテンを通り越して光を部屋に与える。

「・・・眩しい」

俺は布団を頭から被り光に対して抵抗を試みる。

しかし、暗くなると同時にさっきの夢がまたフラッシュバックする。吐き気がした俺は布団をどけ跳ね起きるとトイレに駆け込み嘔吐する。胃液しか出なかった。

さっきのは何だったのだろうかと疑問に思ったが、考えるのをやめる。

胃液をトイレの水で流した後、何をすればいいか考えながら部屋を見渡す。

最低限のものしかこの部屋には送っていないので、一人暮らしにしては中々の広さだった。

20畳の部屋にシャワールームとトイレ、キッチンがある。

他の部屋よりはかなり優遇されていると思い、少し罪悪感が芽生えた。

「そっぴや昨日やつと寮についたのか・・・」

昨日の夜、朝から探し回ってやつとこのことで目的地に着いた。魔法学園メシス第一付属寮に。

俺は飛び跳ねるほど歓喜はしなかったが、嬉しさのあまり涙を出したのを覚えている。

見つけた後、すぐさまこの寮長から部屋の番号と鍵をもらい、部屋に入るとあらかじめおいてあった荷物の中から学園に必要な制服と鞆と教材を見つけ出し、纏めるとすぐさま魔術でベットを呼び出し、布団を敷いて就寝に入った。

一樣寮の見取り図はもらったが、1階につき30部屋で、3階まであるこの寮は実際に歩いて見ないとわからないことだらけである。

次いでに此处、俺の部屋は3階の3001室だ。別に説明しても意味は全く無いが。

俺はとりあえず考えるのをやめると寝巻きを脱ぎ捨て制服に着替えると、洗面台に行き寝癖をある程度直す。

「今日から高校生か・・・」
不安と希望を胸に部屋から出た。

「昨日の夜、俺見たんだよね・・・」

「な、なにを・・・」

「第一寮に黒スーツの男が入るのを・・・体系は中性的・・・というんだろくなあれは。そして髪の色は赤黒かった・・・寮に入ると急ぐようにして寮長に話をつけた後部屋にこもったらしい。」

その後寮長に話を聞いたんだが、何も答えてくれなかった・・・。そしてこの頃騎士達が血眼で探しているのも確か赤黒い髪の色で中性的な

体系の男性だったはず・・・」

「・・・怪しいな」

「そしてもう一つのネタとしてはこの特化Eクラスに編入生だ・・・夏休みの真っ只中編入するのはおかしくないか？というか夏休みが9月15日までつてのがおかしくないか？」

「そりゃあ、お前、著作者が「あ、やべ、日付設定ミスッた」とか

いつて夏休み延期したんだからよ。仕方ないじゃないか」

「・・・というかさ、描写の一つも入らないこの会話に意味はあるのか？」

「無いな」

夏休みの学園で、二人の男子生徒は教室の中で小さくため息をついた。

部屋から出ると小綺麗な廊下を足音を立てずに通り抜け、寮の外に出た。夏休み中は昼間まで寝る生徒が多いのであまり足音を立てずに廊下を歩くのが暗黙の了解だと言うことを昨日の夜寮長から聞いていたので早速実行してみた。

寮の外は中と違い、活気付いていた。

この魔法都市タリスは中部大陸の中心となる都市で、ただでも物流が多い中部大陸だがこの都市はその中でも一番といえる。

そのため、わざわざ遠い国からこの都市に足を運ぶ観光客が多いので、早朝からかなり人通りが激しい。

しかも第一寮の近くには繁華街があり、その繁華街こそこの都市一番の見所になっているためかなり暑苦しくなっている。

俺はあまり大衆は好まないので繁華街を横切って騎士団本部に向かって歩き出す。

何故わざわざ騎士団の本部に顔を出すのかというと、建前はその本部に所属している家族に会いに行くためだ。

「・・・元気にしているのかな。あいつは」

俺はそうぼやきながら人気の少ない所を通り抜け、途中で見つけた果物屋で手土産を購入しつつ猛暑のなか汗をたらしながら熱されたアスファルトを踏みしめ昨日と同様に歩き出した。

人ごみの中、人ならざるものが紛れ込んでいた。実体が無い影だった。形はまるで、壁に映った人影のように見える。

影は一人の青年を見ていた。その青年は戦争に利用させないための保護対象であり、この世の中からすれば『最終兵器』となる者だった。

影はゆらりと青年の後ろを追いかける。青年はときどき何かを感じ取っているのか立ち止まりあたりを見渡したりする、がすぐにまた目的地に向けて歩き出す。

影は青年を尾行する、まるで彼を守るように。青年は気づかないフリをしている、何事も起こらないように。

しかし、そんな彼とは対照的に事件を起こそうと企む人が居る。青年の前には人だかりができていた。

青年は持っているバスケットを地面に投げ捨てその人だかりに向かって走り出す。影はそんな彼の後ろを追いかける。

彼が立ち止まり「何がありました？」と情報を聞き出し、事件の解決を始める。

人だかりの真ん中では重症を負った青年と同じ制服の少女が倒れこんでいた。肩と腹部に深い刺し傷があった。

影は人の言葉に耳を傾ける

「騎士はまだなの？」

「いや、いまこの都市のほとんどの騎士が戦争に出向いているらしい」

「そうなの？じゃあ医術魔術員とかは？」

「それが、15分後に来るらしいが絶対間に合わないだろう」

「誰か治せる人いないの？」

「いや、さっき怪我人と同じ制服を着た奴が治せるとか何とかで」

影は見つめる、人だかりの真ん中で空気中に漂う魔力をかき集め、少女に注ぎ込む青年の姿を。

そして見て野次馬達はざわめきだす。少女の傷口が魔力反応をおこして発光する。少女の傷は完全にふさがっていた。

ソレを確認すると青年は目的地に向かつて歩き出す。少女は青年にお礼を言うが彼はソレを受け流す。

嬉しそうに青年を見つめると少し揺らめいて、また影は青年を追いかける。

少女は青年の背中姿をみながら頬を赤く染めていたのが横切る時に見えた。

(・・・あい、かわら、ずだ、ね)

影はそう呟くと満足したかのように底へ沈むように消えていった。

青年はそんなことも知らずにアスファルトを踏みしめ目的地を変えて走り出した。

第1章 第1 / 15部 小さな野望と優しい魔術師1 (後書き)

- - -
- - -
- - -

メリークリスマス!!! 彼女居ない暦 年齢の Raja です。

さて、今回からやつのこと本編に移っていきます。本当、文才と
か表現力とか彼女とか欲しいものです。

かなり無理やりに纏めています。正直さつき書き上げたばかりなの
で手直しかしてないです。

次の部は本来ならば1つに纏めるはずだった1部の続きです。

- - -
- - -
- - -
- - -

第1章 第2 / 15部 小さな野望と優しい魔術師2

俺は走っていた。今は使われていない廃倉庫に向かつて。

少女の傷はナイフによる特徴的なものが見られた。そして、誰も気付かなかつたという事実から『^{インテリジブル}消姿』の類の技能が魔法が使われていたのである。基本的には後者の確率が高い。

そして、事件が起こるまで何も気付かなかつたこの都市に起こっている違和感。

明らかに昨日より騎士の数が減っている。

休日で観光客が増える一方、騎士もそれなりに導入するはずなのだが、少女の元に駆けつける騎士達が連絡をつけられるまで居なかつたというのが

珍しかった。

普段なら小さな揉め事にすぐに駆けつける騎士団が、街中で魔法を使われて居たにもかかわらず、『気付かなかつた』。

特殊な訓練を施されている騎士が小さくとも場の魔力の乱れというものを感じできないわけが無い。騎士達の『眼』はそこまで甘くは無いはず……。

戦争に多くが出向いているこの時期に小さな事件。そして、誘拐事件が多発しているという情報（野次馬達からのいたただきました）を元に大事

になる前に解決するべく、向かう先が廃倉庫である。

魔力というの使うと少し厄介なもので、使ったらすぐに消えるのではなく、『跡』が残る。

その『跡』をたよりに俺は脚の回転を早めた。

「零隊長殿！座標225・331により先程目標の確認がとれました！」

真夏の真っ只中、声を発した男は硬い金属でできた鎧を着込み、頭をフルヘルムで覆っている格好をしていた。これが騎士の正装である。

そして、男に呼びかけられた青年は、兜の変わりに少し暗めの金髪を輝かせ、男より軽量の鎧をつけ、背中には金の刺繍が入ったマントを靡かせていた。

「・・・そうかつ。現在どこに向かっている！」

青年・・・零は嬉しさを噛み殺し冷静に応答する。男はその場で姿勢をただし、右腕を胸元まで上げ零に報告する。

「現在座標225・331から北東の廃倉庫に向かっている模様！向かう途中、重傷を負った少女の傷を癒していたのでまだそれほど遠くには

行っていないと思われませう！」

「わかった・・・では、俺が目標を追うので皆は休んでいてくれ。いままでご苦労だった！」

零は男の短い応答を聞き流し、そのまま騎士団本部を飛び出すと、魔力を両足に集中的に集め、ソレを一気に爆発させ、走り出す。

この魔法を『速走^{ハイスト}』と呼び、零はこの魔法を使い時速150kmの速さで走る。

走っている最中の摩擦などは、薄く魔力の膜を全身に纏わせ身を守っていた。

そうして零は黒己の背中を追いかけて街を駆け抜ける。

俺は目の前にある廃倉庫を見つめ思考する。

「・・・畏、だよな明らかに。責任は全て騎士団になすりつけるか」
一人で呟くと俺は廃倉庫の扉に手を掛ける。扉は長年使われていないせいか、錆びびていて中々開けるのに苦労させられた。

「お邪魔します・・・っ！」

やっぱり挨拶って大事。たとえ矢で脇腹を貫かれようとも。

俺は自分の脇腹を見る。痛みは襲ってきたが何かと馴れているので、膝を落とすことは無かった。

傷口から落ちる血が止まることなく、倉庫の床にぼたぼたと血溜まりを作る。・・・出血の量から俺は部屋に忘れてきたネックレスの存在と

矢に塗ってある毒の成分を頭で考える。

「・・・コモドドラゴンっていう動物が確かこんな毒もってたよな・・・どうでもいいけど」

俺は矢を肉片ごと無理やり抜くと、抜いた跡の傷跡は徐々に消えていくのがわかる。呪いの一種、あるいは特徴と言える『自動治療』
オー

トヒール)の一種。少し違うのは治療の魔法とは違い、何度も掛けない必要も無く。一度で全く元通りに『再現』してしまう事だ。

この魔法の説明と十字架のネックレスの意味は後々の学園編で語る
ので、今は矢を放った犯人とその仲間の数、誘拐された捕虜の数を
第六感をフルに活用し、気配とその動きを探る。

(・・・敵は三人、二階に二人と、捕虜の近くに一人。誘拐の常習
犯だな。さて、捕虜は5人、見張りに犯人が1人居るくらいか。)

俺は読者の皆様にわかりやすく丁寧に話したが、無理だった
ようだ。

そうしているうちに、右肩にさつき同じ形状の矢が2本突き刺さる。
倉庫の中は入り口から差し込む光だけで暗くあまり目は見え無い状
態だ

った。

ならばと、俺は『想像』する。まず犯人の位置の『仮定』、二人は恐らく二階の入り口付近の左右両端に居ると『仮定』し。次に頭の中で『想像』する。まず両端の犯人の腕と足の麻痺した様子。そして捕虜に近い犯人の気絶。

そして俺は『創造』した。

すると、入り口の近くで若い男性の叫び声と、目の前から地面に人が倒れる音を確認する。

「ッ………！つてえ」

痛む頭を抑え、俺は少しずつ前にすすみ、ちょうど6歩の所で足に何か引つかかる。おそらく犯人と思わしき人物だった。顔は黒褐色の見た目30歳の黒い髪に顎鬚を生やした男性。……べただな。

そして男が持っていた携帯用のライトを奪い取ると、そのまま目の前を燈す。

光で映し出されたのは柱に縄で巻かれた女性5人。いずれも俺の編入先の女子生徒だった。

4人氣絶中で、1人は口にガムテープを貼られてふさがれているせいか、ふごふごっいつていた。

「あーっはいはい、はずしますから。少し落ち着けな」

俺は女子生徒達が縛られている縄を犯人の男性が持っていたナイフで切り、全員口に貼られていたガムテープを一人一人はがしていく。「……あ、ありがとう」

女子生徒一人がさういうと、そのまま気を失ったか重力に逆らうことなくそのまま地面に倒れた。

「っとお。おいおい……さて、おい。その準ストーカーの騎士手伝え」

俺は振り向くことなく声を発すると、息を切らした金髪の騎士がやれやれといった感じで腰に手をあて、鎧を力チャ力チャと鳴らしながら

こちらに歩いてくる。

「・・・久しぶりですね。黒己さん」
「どっちかっていうとあんたの方が兄気質だけだな」
俺と騎士の零との再開は、薄暗い廃倉庫となった。

さて、それからというもの。俺は零に連れられ、騎士団本部に来ていた。女子生徒たちは跡から駆けつけた騎士団員達に保護されていたのを見て安心した。

そして、俺はというと会議室に連れられ。零に久しぶりに会ったにも関わらず「どうしてあんな危険なマネをしたんですか!」とか、「行く前に騎士団本部

に顔を出してから行くとかあるでしょう!」とか「5年前と何も成長せず変わらない馬鹿ですか!」など散々言われていた。

俺の返答はすべて「すいませんっした!」であって・・・完全にふざけていた。

そして、ソレが小1時間続いたあと、会議室に黒いスーツの大男と鎧をきた大男。・・・とりあえず適当にながすか。この人双子です。一様紹介。顎鬚を蓄えた黒スーツが俺の実の父親で神路魔 相馬。

そして、鎧の方は親父の双子の兄、神路魔 領斗である。

領斗さんは現在の騎士団の5代め総長であり、中部大陸の『神の盾 (aegis)』と呼ばれている人である。

そして、親父は俺の編入先の学園メシスの創立者であり、世間では『救世主 (Messiah)』としてたたえられている。

「親父、領斗さん。ちわつす!」

「ちわつす!」

俺達は片手を挙げ、ノリのいい挨拶をする。2人は当然のごとく八毛る。これがまず基本、『救世主』?中部大陸の『神の盾』しらん

しらん。所詮俺達はただの人。

となりで「やれやれ」と呆れている零も見なかったことにする。

挨拶が終わると領斗さんの巨体が俺の目の前まで来ると、肩にズシリと重い手を乗せる。

「大きくなつたなあ黒己。んで？記憶は戻らんのか？」

「はい、まだ何も戻ってないですね。」

俺は苦笑いで答える。領斗さんは手をどけ、腕を組みまた苦笑いでこちらに返す。隣で親父と零が話しているので、あちらの邪魔はない

でよく。

「で？さっきの事件はまあ、こつちで処分するからいい。ここに来た理由はあれだろ？最近の全大陸の勢力とか、大きな事件が起きて無いかとかなる？」

完全に読まれている。と、いうか前々からそういう話になっていたのでもあまり驚きはしなかった。そして、領斗さんは大き目の紙袋をこちらに差し出す。

騎士団本部は全大陸に内通しているため大抵の事件や内戦などの情報はここで見れるようになってる。しかし、それはあくまで騎士達の

為だけにあり、ましてや庶民に情報を漏らすことは決して無い。

俺は紙袋を指し問いかける。

「これは・・・まさかとは思いますが、『全て』・・・ですか？」

「おおう、ファイリングとか面倒だから、そつちで勝つ手にやつといてくれ。渡す前に警告しとく、情報は全て見た後は燃やせ、そして外側にもらすことは絶対にするな。」

「はい、わかっています」

俺達は悪笑みを交わし、俺は踵を返すと

「俺は世界を変えるだけですから」

一言残しその場を去った。

第1章 第2 / 15部〜小さき野望と優しい魔術師〜（後書き）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

さて、うん。すいませんでした。何か、こつ。期待していた方々に
申し訳ないです。

どうもただただの高校生 Raja です。最近コーヒーにココアを混ぜ
るのにはまっています。

今回の1部、2部は一つに纏めるつもりだったのですが、妄想のな
かの黒己君が暴走したので二分割しました。
本当にもうしわけないです。

次回予告

黒己は資料の解析と学園生活を満喫します。

第1章第3 / 15部〜学園生活と荒れている世界〜

- - - - -
- - - - -
- - - - -

第1章 第3 / 15部（学園生活と荒れる世界1）

薄暗い部屋の中に明かりが一つ、デジタル時計にはAM2時13分が表示されていた。

「スー・・・スー・・・」

ペラペラと紙をめくる音とも一つ。部屋に寝息。しかし、ソレは部屋の住人のもではなく・・・あ、どうも神路魔 黒己です。

部屋の寝息の発生元・・・非常にありがた迷惑ですが、部屋に女の子来ています。というか部屋に帰ってきたらいたんですよね。

あの騎士団本部からでた後、日用品の買い物と食材。あと、服などの買い足しをした後、朝出かけたのにもかかわらず、寮の自室に入ったのは午後7時だった。・・・そしたらね居たんですよ。女の子が。

リア充爆破隊は出勤しなくていい、何故かって、そりゃコレ「妹」ですから。

もちろん精神衛生上はよくないかもしれんが、妹に手を出すまで俺は腐っていない。というか、そういうことよりコレが寝てるせいで俺の寝床がないのは考え物である。

起こすにしても時間が時間だし、そもそも許可したの俺だし。・・・仕方ない。机で寝るか。

そして俺は資料を切りのいいとこまで纏め、腕を組むように机にのせてそこに頭を乗せて寝た。

・・・それにしても妹様は成長していたのが少し嬉しく思った。

俺は気を失うように夢の世界に取り込まれていった。

世界が黒に歪む。目の前で大勢の人が壊れる。自分の腕がもぎ取られる。千切れる。体が切り裂かれる。

痛みは無かった。ただそれが可笑しくて笑っていた。狂ったような笑い声が頭の中に鳴り響く。

そしてまた世界が、黒煙と血で濁された世界が崩れ割れる。世界が変換される。いつの間にか白い世界に変わっていた。

(・・・俺は、ここを知っている?)

頭は完全に冷えていた。周りを見渡す。沢山の子供達が居た。見た目は5歳の幼児だと見受けられる。全員、病院の患者のような白い服を着ていた。

(いや、ここは・・・ツツ!!!)

頭痛に襲われる。痛みで気を失いかけた。しかし、ここで意識を失うわけにはいかない。

何とか持ちこたえるとまだ痛む頭を抑えながらも一度周りを見渡す。子供達が無邪気に遊ぶ中、その中に部屋で一人、隅ですわる分厚い本を

読む女の子がいた。女の子は白く長い髪をたらし、眼鏡をつけ右目だけを覗かせていた。自然に俺はその子に惹かれるように歩いていた。

「なにしてるの?」

俺は無意識の中で話しかける。

「別に・・・」

女の子は本を読む手を止めないで不機嫌極まりない声で返事をする。俺はソレを見ながら苦笑いする。そして断りも無く女の子の隣に座る。

「・・・なにしてるの?アナタは遊ばないの?」

女の子は本を読む手を止め、頭を上げてこちらの顔を見ながら小さな声で俺に質問する。

「僕はさ、感情と力のコントロールが下手だからさ。もりあがっちゃうと皆を傷つけてしまうんだ」

「……………そう」

俺が答えると女の子はまた頭を落とし、本を読みはじめる。

「君は？皆と遊ばないのかい？」

「……………私はいい」

「君の名前は？」

「……………ーク」

「え？」

「……………『鷹の目(hawkeye)』って大人たちから言われてる」

「そっか、じゃあ僕は『最終兵器(joker)』って答えないといけないね」

「……………ジョーカー。そう、アナタはもう戦争にいったの？」

「ああ……………いや、うん。2回……………ぐらいかな」

「辛く……………無いの？」

女の子は光……………心が無い虚ろな目で本から顔を上げ俺を見つめる。どこか遠くを見ているような……………虚無の目で。そっか彼女は壊れているんだ。

「まあ、物心とかつく頃には手が……………血に染まっていたから。君は……………そっか辛かったんだね」

「……………ツ」

女の子の目は少し光を取り戻し、揺らでいた。

「泣いていいよ……………泣きやむまで僕が隣に居てあげる。泣きやんだら、そうだな。その本について話して？」

「ツうう……………うえええ」

女の子は俺の胸の中で泣く。俺は受け入れるように彼女、『ホークアイ』の背中に手を回す。

「……………辛かったね。大丈夫泣いていいよ。僕が受け止めてあげる。だから泣いて……………いいよ」

俺は何度も呟く。彼女が壊れたように泣きじゃくるのを見て心が痛む。

普通の大人からみるとただの子供の話。しかし、俺は彼女……いや『ホークアイ』の『心』が壊れていたのに……大人たちは見て見ぬフリをしていたんだろう。俺はそんな彼女を見て『道具』としてではない『人』として一つの感情が心の中で芽生える。

怒り、憎悪ではなく復讐心でもない、俺は……そうだ、ここで戦争に駆り出されるのが普通だと考えていたんだ。『道具』として生きることにも何を感じなくなっていた。彼女を見て……いや、世界の真実を知って俺は絶望したんだ。そして……誰よりも罪深いこの

俺は……誰よりも優しく、強く。人間を壊す対象じゃなく、人間を守る対象に彼女を始めて求めたんだ。

「……守るから。絶対」

僕は……いや、俺は道具のジョーカーではなく……人として、神路魔黒己として彼女を守ると誓ったんだ。

（そうだ、おもいだした。この後俺は、皆は）

そしてそこで眩い光に照らされオレは目が覚めた。

騎士団本部総長室。時計の針は丁度2時をさしていた。中には二人の大男。一人はスーツ姿で、ネクタイを外してかなりラフな格好に

なっていた。そしてもう一人。

こんな時間でも鎧を着込み、マントを背中に預けていた。腰には普通の剣より少し刃の幅が広い剣が腰に携えてある。

その二人はワイングラスの中に入っている葡萄酒を少しずつ飲みながら静かに昔話を語っていた。

「……息子が、黒己がこの家族に帰って来て10年、か。時間が立つのは早いな」

黒スーツの男が悲しみと懐かしさを籠めそう呟く。

「そうだな」

鎧姿の男が短く答えると、ワイングラスを口元に持ち上げ傾ける。

「あいつには感謝しないとな」

「そうだぞ？あいつのおかげでお前のとこの家族崩壊なくなったよ
うなものだからな」

「ツハ、違くない」

二人はツククと控えめな声で笑い合っていた。

「んで？編入先のあいつのクラスに・・・いるんだろ？」

「ああ・・・あの戦争の被害者。『鷹の目（hawk eye）』」

「大丈夫なのか？」

「・・・その場頼みだな」

黒スーツはワイングラスから一気に葡萄酒を飲み干すと机に荒々しく
グラスを置く。

「しかし、特化魔術課か」

「なんだ？」

「いや、お前らしいと少しばかり考えてな」

「そうでもしないとあいつ等を、子供達を守れなかった。・・・あの戦争の被害者は多すぎた」

スーツの男は立ち上がり、部屋のドアノブに手を掛け、そして扉は静かに開きスーツの男は夜の闇に飲まれるように総長室をあとにした。

「子供兵器（child weapon）・・・たちの『救世主（Messiah）』か」

鎧の男はワイングラスに葡萄酒を注ぎ足し一人でまた飲みなおす。
そして夜は更けていった。

「兄さん、おきなさい！このバカ兄さん！！！」

俺の体を誰かが揺らす。誰だか知らんが俺の惰眠をジャマするとは・・・って妹だよな。わかってるよ、うん。

「おはよう。今日も可愛いね、凜」

「っお、おはようございます、黒己兄さん」

少しからかっただけで赤面し、すぐに挨拶を返す妹の凜。

「黒己兄さん、昨日はありがとうございました。そして、今日の予定はもう勝手に決めましたのでいつまでもそこで座っていないで立ち上がって私の分の朝食と着替えを済ましてください」

黒い長髪が太陽に照らされながらこちらを見る。顔はいつもの透き通るような白に変わっていた。

「よ、容赦ないな。わかったよ。少しまってな」

くしゃつと髪を掻き分けると俺はすぐに冷蔵庫を開けまだ起ききっていない頭をフル回転させる。凜は腑に落ちない顔でこちらを見ていた。

「どうしたよ」

「いえ・・・ただ、文句も何も言わないのだと思わして」

「ああ、3年も家を無断で空けたお礼とでも受け取ってくれ」

俺は適当に受け流すと冷蔵庫からトーストと卵、ベーコンに胡椒を取り出す。

調理はいたって簡単。油をしいたフライパンをすこし熱して、ベーコンを少しカリッとするまで焼くと、すぐに卵を落とし、白身に色が出てきたら皿の上あげるだけ。いたって普通なベーコンエッグだ。

「黒己兄さん。向こうでは「調理はいたって簡単」から「ベーコンエッグだ」はたったの数秒でしかないわ。兄さんすごい、数秒で・・・」

「凜、すこし、だまろうか？」

俺は目を細め威圧を掛けながら凜を睨む。彼女は空気を察したのか、そのまま黙り込む。

「Rajaさんカットお願いしますね」

俺は画面の向こうで見つめる作者に向かって喋りかける。

第1章 第3 / 15部 学園生活と荒れる世界1 (後書き)

- - -
- - -
- - -

こんにちはR a j aです。庭先から逃げてきました。
はい、ということやっとな第1章5分の1終わりました、ここまで
見てくださっている皆様に感謝を。

そして、見返した小説(笑)にはなかなか誤字脱字が・・・うわ
ああ。

意見、指摘などS k y p eでお待ちしています。

S k y p e I D : s l e e p 1 1

次回予告

第1章第4 / 15部 学園生活と荒れる世界2

- - -
- - -
- - -

第1章 第4 / 15部 学園生活と荒れる世界2 (前書き)

* 一度書いたデータが全て消えてしまったので、前の部の次回予告と全然違う物語になっています*

第1章 第4 / 15部 学園生活と荒れる世界2

魔法学園メシス。中部大陸の中に創立している魔法専門学校の中の最上の学園。

おもに魔法の素質に溢れた生徒が中で往来しているわけだが、その中でもより優れた素質を持つ生徒は特別なクラスに配属することになる。

特化魔学課と呼ばれる課目がそれにあたる。

特化魔学課と普通魔学課はほとんど同じシステムだが、2つ異なる点がある。

まず普通魔学課には高いほうからA・B・C・D・E・Fと成績順でクラスわけされているのに対して特化魔法学課は成績に関係なく

B・C・D

・Eに分けられる。そしてもう1つの違いはというと、普通魔法学課のクラス平均在籍数36人に対し、特化魔法学課は20人と少ないらしい。

で、夏休み明けに特化魔法課のEクラスに編入する俺は今その学園にきているわけだが、どうも凜は学園の生徒会長で、しかもかなり人望があるらしく、学園に来ている生徒に合うたび頭を下げられたり挨拶されたりと中々のものだった。妹が優秀だと兄として嬉しいものだと思えて実感する。

まあ凜はシスコンフィルターを外してもかなりの美人だとも思う。顔は整っていて、髪は綺麗に手入れされているし体系も少し発展途上な

ところもあるがいい方だと言える。それに中々気さくな性格なの人望があつて当たり前だろう。いつの間に成長したんだこいつは。

ついでに零もなかなかのイケメンで少し顔に傷がつこうともそんなやそこの男性は太刀打ちできないほどのルックス、それに騎士の隊長も

勤めているわけでありまして体もかなり引き締まっていると思う。弟・妹が美形なら俺はというと、平凡もいいとこだ。ルックス普通、体系中性的、以上。一番上の兄として俺は妹と弟に恥をかかせているような

もんだろうなと俺は思うのだが、凜や零はそんな俺のことを「兄さんは自分を卑下しすぎです」「と言うとのこと。もちろん俺にはそんな

つもりは無いし、別にもてたいとか、人気者になりたいとかそういうのも一切興味ないのでどうでもいいことだ。

なんやかんや考えているうちにある程度学園を見終わると先導していた凜がこちらに振り返る。

「少し、食堂の方にかれませんか？ちょうどお昼になりましたので」

凜は顔の前で手を合わせて微笑みながら言う。別に断る理由もなく俺は微笑を返して「わかったよ」と短く答えると凜の隣に行き歩幅をあわ

せて食堂に向かった。

学園メシスの校長室に零が不機嫌な顔で溢れかえった書類の整理をしていた。零はいつもの鎧姿ではなく、半袖の白いTシャツにネックレス

をつけ、下は青いジーンズに靴は黒いランニングシューズを履いていた。いつもとは違うラフな格好は普段から考えられないが、零もまた

普通の健全な青年だということを出させてくれる格好だ。

そんな彼は珍しく非番で、街で買い物をしているところを神路魔兄

弟の父、相馬に捕まり溢れかえった書類の整理を手伝っているところだった。

零は基本的に何でもでき、優しく慈悲深い万能な人間だが、流石に快く街で買い物をしているときにいきたくも無い学園に拉致でもされれば

不機嫌にもなりはする。そして今も彼の不機嫌な黒いオーラが溢れかえった書類などで狭くなった校長室を埋め尽くしていた。

相馬はそんな空気にいたたまれなくなりつつも書類を片付けている。「……………ハア」

零は溜息を一つつくとおもむろに整理する手を止め、纏まった書類を父親の座っている前の机に勢いよく置くと彼は買い物でかさばった紙袋を持つ。

相馬は目を丸くして驚いているが零の押しつぶすかのような重苦しき不機嫌オーラに圧されて言葉を出すことはできなかつた。

「それでは失礼します」

彼は声を低くさせながら別れ挨拶をすると扉を開けて力任せに閉めて校長室を後にした。

「……………こ、こわいな」

相馬は勢いよく閉められた扉のせいで舞った書類を目で追いながら呟いた。

都市タリスで異変が起きた。都市の一部以外が切り取られているかの用に人が消えていた。

その中にただ一人の少女が、病院患者のような白い服をなびかせながら、不安定な足取りで歩いていた。まだ幼いくて危うい容姿の手には

チエーンソーが握られている。銀に光る刃には赤黒く生々しい肉片と血がベツトリついていた。

彼女の顔は唇を高く吊り上げた不吉な笑みを浮かべていた。

「こわいこわいこわいこわいこわいこわいこわいこわい」

まるで機械でリピートされているかのように彼女は呟く。

不安定な足は意思が有るか無いかわからないまま、学園メシスをめざしていた。

学園の食堂で昼食を食べていた時にそれがきた。

「っ!？」

俺はあわてて振り返るが、夏休みのかかわらず食堂は賑わっているだけだった。

そんな姿を見て凜は不思議そうに隣で食事を取る手を止め俺を見つめる。何も無いよと手でジェスチャーすると凜は首をかしげながらも食事の続きを始める。

都市が不意に切り取られた感覚に陥る。魔力の大きな変動があったのにも関わらず学園に居る生徒は誰一人と気付かない。いや、気付けない。

この感覚は昔・・・そう戦争の時、実験で使われた『空間切除』の魔法に酷く似ている。しかし、昔とは違い魔法の隠蔽、規模は比較にならないほど改善されていた。

これが使われるときは決まって『兵器実験』が行われることを示していた。そして、今回のターゲットは間違いなくここ学園メシス。俺は震える手を無理に押さえようとするとそんな意思に関係なく手が大きく震える。

「兄さん・・・？」

凜が今度こそ不審な顔で俺を見る。凜の手が俺の手を包み込んでいた。

「何かあったのですか？」

「凜は気付かないのか、都市の一人居なくなっていることが」

「え、なにを「兄さん！！！！」
凜が喋ろうとするとラフな格好をした零が食堂の入り口で大きく俺の名前を叫ぶ。その声は心なしか震えていた。食堂がざわめきを起こす。

俺は立ち上がると食堂の入り口に向かって走りだす。何故零がいるかは今はどうでもよかった。ざわめきは大きくなる中、俺と零は食堂を後にすると

そのまま学園の外へ向かって走り出す。

「零、街の人が居なくなつたのに気付いたか？」

「はい、大きな魔力反応……いえこういう場合はクラフィス反応と呼べばいいのでしょうか。ここ以外の都市の人の気配が無くなつてます」

「零、急ぐぞ『兵器』が来る前に……外に出ないと生徒が巻き込まれる！」

俺達は息を荒くし、『^{ハイスト}速走』を使って外に向かった。

零兄さんが叫ぶと同時に食堂がざわめきを起こしていた。

あの若き騎士団隊長で有名な零兄さんがあれほどまでに声を震わせて叫んだので当たり前のことだ。

しかしなにがあつたのだろうか？黒己兄さんは零兄さんと一緒に慌てて何処かへ行ってしまわれた。

その直前に言つた黒己兄さんの言葉都、市の人が居なくなっている……。そして、さっきの慌てよう。黒己兄さんは何があつても冷静に

対応する人なのに。まるで何かに脅えるような、そんな雰囲気を感じるときは持っていた。

しかし、何があつても第一に私のすることは兄さん達のサポート。兄さん達の足手まといにならないためにはまず、この場を沈めるこ

とが先決だと私は冷静に考える。

「皆さん、少しお話を聞いてください！」

私はざわめきを止めるように、精一杯の大きな声をだした。興味本位で外に出ようとした生徒達は私の声に反応してこちらに振り返って食堂に

戻ってくる。

私は頭の中で、ここに居る人たちを外に出さないように説き伏せるには何を言うべきかを考え、そして力一杯声をだす。

「今外では大きな事件が起こっています！騎士団隊長、神路魔零様は皆様に何かあった時対処するためこの学園に残るようにと言っていました！そのことを学園に残っている生徒全員に伝え、学園の校舎の外には一歩も出ないようにするようにしてください！これは

訓練ではありません！緊急事態ですので遊び感覚は捨ててください！」

私はソレを言い終わると校長室に向かって走りだしていた。

俺と零は学園の校舎内のグラウンドにいた。外に出た瞬間に感じ始めた肌に張り付くようなネットリとした殺気。

そして、予想通り都市には誰一人、『兵器』を残して姿を消していた。そんな現状に零は驚きを隠せないまま辺りを見渡す。

俺は十字架のネックレス首につける。このネックレスは俺にとって命綱であり、そして重りでもある。

そして、それが現れた。

容姿は幼く髪は何年も手入れされていないかのような長髪が鈍く太陽に照らされ鈍く金色に光っていて、細身で有りながらも自分の身長半分位ものある

チェーンソーを引きずりながら不安定な足取りで学園の門をくぐった。
患者のような服を地面に引きずりながら、裸足で土を踏みながらこちらに確実に向かって来ている。

俺は信じたくも無かったが信じるしかなかった、『子供兵器（child weapon）』、戦争の『道具』でしかない名前が俺の頭をよぎる。

胸焼けとおもに不意に頭痛が襲った。どうしようもない過去がよみがえるかのようにだった。零の呼ぶ声がかすれて聞こえた。

いつの間にか俺の右肩が切り裂かれていた。その衝撃で俺は目を覚ますかのように後ろに二回ほど飛んで『兵器』と距離をとる。跳んだ後には

血溜まりが点々とできている。

「ハアハアハア・・・くそ。くそ！またか、また繰り返すのか！！」

俺は叫んでいた。右肩からの腕はもう元に戻っていた。その光景を零は世の物ではないような目で見ていた。

そんな目で見ている零をよそに俺は目の前の『兵器』を見据えた。彼女の手を持つチェーンソーはすでにモーターが動いており、刃を回転させながら大きな音を立てている。

通常のチェーンソーとは比較にならないほどの回転速度。そんな重たいものを片手で押さえ込む少女の腕には注射器の後があった。

「ドーピング・・・」

俺が副う眩くと同時に彼女は唇を吊り上げて笑いながらこちらに向かって走り出す。俺はとっさに右に体を傾けた。一瞬で間合いを詰められ、チェーンソーが体をかする。

空を切った刃は地面に深く食い込んでいた。

零はソレを見逃さずに彼女に蹴りを入れようとするが、ソレもまた空を切っていた。彼女はさっきの場所の半歩後ろにいた。

「こわいこわいこわいこわいこわい」

彼女は笑いながら同じ言葉を呟く。その言葉に感情は無かった。

「零!!!!!!後ろに下がれ!」

俺は啞然としていた零に激を飛ばすと『想像』した。零の目の前にショートソードが地面に突き刺さっているイメージ。そして『創造』する。

零の目の前には、今まで無かったショートソードが地面に刺さっていた。

「ソレをつかって学園を守れ!」

俺はそういうと同時に『兵器』に向かって飛び込む。が、彼女はすでに俺の後ろに回り込みチェインソーを振り下ろしていた。

血と肉片が飛び散る。ベチャベチャと音を立てながら土を赤く染める。後ろで叫びながら零が剣を『兵器』に向かって振りかざすのがわかる。

「っ!!!らあ!」

俺は背中を抉り続けるチェインソーを無理やり体を前に倒して抜くと、すぐさま兵器の腕をつかみ零から距離を離す。

「兄さん!!!!!!」

零が剣で威嚇をし彼女の気を引いてくれてるのがわかるが、長くは持たない。

背中から血が噴出してるのが容易に想像できた。襲い掛かる痛みが俺の意識を断とうとする。俺は喉に詰まった血を吐き出す。

「っは。。。やるしか。。。っ!」

地面に膝をつけていた俺は無理やり脚に力を入れ立ち上がる。

『想像』する。自分の手にナイフが握られているのを。そして『創造』した。

頭痛がガンガンと痛みを増す。

「ハアハア。。。てえっ」

右手で頭をおさえつつ、左手は握られたナイフの刃を逆さかに持ち替えていた。

「こわいこわいこわいこわいこわい。。。皆こわいこわいこわい!」

「！！！！」

『兵器』が叫びながら俺の目の前に現れる。『瞬間移動』テレポートが彼女特有の魔法だと先程の戦い方でわかった。空間と空間の間を障害物に
関係なく自分の

思い通りに移動する。厄介な魔法だ。それに加え、切れ味と回転数
がものすごいチェーンソーがプラスされている。普通の人間には反
応できるかって。俺はかつての戦場を思い出すかのように頭を目標
の無力化するためだけに使った。

「Repeat」

小さく呟く。『兵器』の目の前にナイフが不意に現れる。そのナイ
フを右手でつかむと彼女の右腕を切り裂く。

「いたいいたいいたい！！！！いたいいたい！！！！」

彼女は苦痛で叫ぶ。そんなことも構いなしに俺は足で切り裂いた
兵器の右腕の傷を蹴飛ばし、チェーンソーを彼女から引き離れた。

「やめてやめてえええ！こわい！いたい！！イタっ・・・イ」

叫ぶ『兵器』の後頭部をナイフの柄で殴り気絶させる。彼女は白目
を向きながら重力に身を任せて倒れる。

ソレを見届けた後、俺は後ろを向く。足と胸に深い切り傷を負って
いた弟の姿が目に入る。

「兄さん、大丈夫ですかっ・・・っっ」

零は自分の心配もせず俺の方に歩いてくる。歩いてきた道に沿っ
て赤い斑点が土の上にできていた。

「とりあえず休め、まだ『異変』は治まってない」

俺はそういうとナイフを構えなおした。

第1章 第4 / 15部 学園生活と荒れる世界2 (後書き)

- - -
- - -
- - -

データのバックアップとっていなかった高校生の Raja です。

さてさて、前の部の最後の文章と後書きでコメディイを予想していた方たちには申し訳ないことをしました。

学園の編入は恐らく次かその次の部になりそうです・・・これからバックアップを取るように心がけます。

次回予告

もはやこの次回予告は何の意味もないと悟りを開く Raja でした。

第1章 第5 / 15部 学園生活と荒れる世界3

- - -
- - -
- - -

第1章 第5 / 15部 荒れる世界と学園生活3

ナイフを構えたまま時間がたつ、あと数秒で目の前で倒れている彼女は目を覚ますことはわかっている。

『子供兵器 (child weapon) …… 魔力、筋力などの精身体の成長が著しい子供のうちに兵隊としての教育、育成され戦争に出される『道具』』

俺が10年前に一度研究員とデータ、研究所を跡形も無く消して、残っていた子供は全員騎士団に保護されたはずだが……。
しかし、研究のソースをもう一度立ち上げて目の前に倒れている彼女が作られたというのは事実。

恐らく大量の薬を投与され、精神と体共に壊れかけている。二度と御目には掛かりたくなかった光景、彼女という事実。久しぶりに本気で

怒りを覚えた。……さて、しかしながらこの怒りをぶつける目標はどこに居るのやら。

あのと時の一人の協力者が居れば見つけるのも一時間も掛からないうちにできるんだけどね。

「う……うう、ここ、どこ？怖い……怖いよお」

彼女は目を覚まし、長髪を地面にたらしながら立ち上がり周りを見渡す。なにか小さく呟きながら、じょじょにこちらへ歩いている。精神が安定しているのか、先ほどまでの不安定な足取りではなくきちんと前に前進できているのが伺えた。

俺は彼女に近づくと、彼女は俺を見るとおびえて体をより大きく震えさせた。

「そんなに怯えなくていい。俺は神路魔黒己と言う。あなたのお名前は？」

彼女は震えながらも俺の質問に答えようと考えるが一向に出てこない様子だった。返答はもちろん「わからない……」だった。

「そっか、うん。怖かったね、大丈夫だから。大丈夫。」

俺はそういいながら彼女を優しく抱き寄せる。彼女は驚きつつも目に涙を浮かべる。

「怖い、怖い、皆怖いの。何もかも怖いの。アナタは何？私、はなに？」

不安定な震える声、言葉の意味がわからなくなってきた。不安と恐怖が折り重なっているのか体がまだ震えている。

「大丈夫、俺が守ってやるから。・・・だから、なにがあつたか教えてくれないか？」

「わからない、わからない・・・でも、・・・っグスあたた、かい」
彼女は俺にしがみつくように胸に顔を埋めた。俺は頭をなでてできるだけ彼女が安心できるようにする。少しだけ時間が必要だな。

ああ、どうしようかな・・・。軍絡みの厄介ごととかもっ勘弁なんだけど。

「兄さん、とりあえず学園の中に入ろう。父上にもお話をしないといけません」

俺は無言でうなずいて立ち上がろうとする。

「どこに・・・いくの？」

「俺の父親のところだ。あなたを保護するためにも会いに行かなきゃならない、だからついて来てくれるか？」

彼女は俺の右腕の袖を力強く掴みうなずく。

ソレをみとどけた俺と零はゆっくりと学園の中に向かって歩いた。

「お父様！」

私は扉を力任せに開けて大声で叫ぶ、息を切らしながらだったのであまり大きい声にはならなかった。

お父様はなにやら資料と睨めっこをしていましたがそんな姿がいま腹立たしく思えた。そんな事をしっつか知らずか私の方に頭だけを

向ける。

「生徒の抑止ご苦労・・・はあ、面倒なことになったなあおい。凜、茶淹れてくれ。」

「あ、はいただきます・・・じゃない！何があつたのか教えてください！」

私はそういつつもお茶を淹れる。少し落ち着いたほうがいいかしら？でも兄さん達のお役に立ちたいのもあるから焦る気持ちも・・・うう。

「さて、まず始めに状況だな。凜、今お前は魔法を使えるか？」

「え？」

私は質問の意味がわからなかった。兄さん達は魔法を使って外に出たんだから当たり前に見えるはず。

「使えるか、使えないか・・・どっちだ？」

「やってみます」

私はお茶をお父様の机の上に置くくと魔力に干渉して魔法を使おうとする。けど、魔法を使えないどころか魔力事態に干渉できなかった。おかしい、こういうことは今まで無かった。でも兄さん達は・・・
「・・・どついうこと？」

「お前は今、魔力に干渉しようとしたな？・・・しかし、できなかった。つまり今この場には魔力が無いことになる。しかし黒己は外でお前達の

言う魔法を使っているはずだ。どついうことがわかるか？」

お父様の行っている事がわからなかった。魔力が無い？ありえない！魔力は一分間で人口の約20倍の速さでできているというのに。ソレが無くなるということはそれだけの魔力が消費されたということになるが。そんな魔法は無いはず。わからない。

「さて、お前はきつと魔力が消費されたとか考えているかと思うが、それは間違いだ。魔力は消費されたんじゃない。魔力は元から無かつたことになっている」

「は？」

「いや、言い方がまずかったか。魔力が無い世界に隔離されている。といったほうが正しいか」

お父様は続ける

「魔力はクリフィスと何か混ぜてできているのはわかるな？そのクリフィスともう一つ、それはまだ何か判明されていないが今はそれが

無いところに来ている。しかし、黒己は魔法を使っていた。つまり、クラフィスそのものに干渉していたということになる。これはこの学校

の生徒、教職員なら誰でもできることだが、使用にいたるまでの強い干渉はできない。そもそも、クラフィスだけじゃ常人は何の利用価値も無い

空気になる。しかし、黒己は別だ。クラフィスのそもそもの原理を理解しているあいつなら、たとえ魔力が無くとも魔法が使えるということになる。

それとシックスセンス、あるいは才能の違いか。干渉率が人の200倍もあるあいつの生態はまだあかさされてないが。事実、あいつは人のソレとは違う。

ついでに俺も少しはここで魔法を使えるが、あいつみたくそこまで強いのを使えない、もしかするとソレが『子供兵器（child weapon）の力か・・・』

お父様が一人でまた呟きながら考え始める。

「・・・凜、もう一つ聞くが『パラレルワールド』って信じるか？『パラレルワールド・・・この現実とは別に、もう一つの現実が存在することを想像することですよね？』」

私はお父様の質問に返答する。何故いきなりその話になったのかいまだにわからない。

「俺の解釈では『並立する世界』。例えば、2103年8月28日魔学世界革命がもし無くなり、科学がより進化した世界とかな。あるかは知らんがもしかすると

なつたかもしれない。そういうのがパラレルワールドだが・・・今回の事件はそのパラレルワールドが関係しているかもしれない。「何故そう言えるのです?」

私は質問を投げかける。そしてお父様はもう一度資料に目を通すと資料を上放り投げ椅子に体重を掛ける。

「わからん・・・」

「はえ?」

「わからん! まったくもってこれっぽちもわからん理由はない、ただそう思っただけだ」

お父様は諦めたかのような顔で天井を見る。無責任な! ここまで言っておいて。そういう気持ちをよそに校長室の扉を開く音がする。音に反応しそちらに振り返ると、外に出ていたはずの黒己兄さん、零兄さん、後は・・・小さく幼い容姿の女の子が立っていた。

「親父、その話当たっているかもしれないぜ?」

黒己兄さんはそう口走ると口の端を吊り上げて楽しそうに微笑んだ。

「親父、その話当たっているかもしれないぜ?」

俺はそう口走る。先程のパラレルワールドの話は事実にならなかつたものの、そういうことになっていたかもしれないという現実。もう一つの

現実と見てもいい。いまこの事件を引き起こしているのは間違いなく軍。もしくは、その上の奴等。そして使っているのは間違いなく『空間切除』あるいは

それと同種の『魔術』だということはある。そして先程のパラレルワールド説・・・もう一つの現実を今の現実置き換える魔術そんな魔術はあってもおかしくはないと裏付ける魔術師が二人、俺とこの俺の袖を掴んでいる名無しの少女。

「親父、俺の意見を述べていいか? 他言無用で頼む。皆もだ」

「ああ」「わかりました」「了解兄さん」

親父達は小さく頷くのを見ると考えをまとめ話を続ける。

「まず初めに、コイツの紹介からだ」

俺は右腕に引っ付いた人影を指差す。

「こいつは10年前に俺が潰したはずの『子供兵器』の被害者。名前はるか記憶すらも曖昧らしい。そして、コイツの能力は『空間移動』いわゆる

テレポートなどと考えてくれてもいい」

皆は少し驚くが、無言のまま相槌を打つ。

「んで、普通はそれだけで思考をやめるんだが、今回はもつと奥に進んでみようと思う。まず、そもそも『空間』とはなんだろうか？と考える。

適当に当てはめるとしよう。例えばそう・・・先程のパラレルワールドなどはどうだろうか？テレポートを行うときにはその場所から何者の干渉も受けずに

目的の場所まで行く能力だが。行く間、どこを通っているか・・・これはまだ実証というか、だれも考えなかったことだからほとんど憶測になるのだが、パラレルワールド説が有力になる。移動するときに、この世界に穴を開けて、そして『自分がそこにいる世界』に入り込む。

そう考えてみよう。そして、俺の魔術はこの場ではつきりと言うが世界を作り変えるのではなく、世界を置き換えるに等しい感覚だ。その考えの時もパラレルワールド説の筋が通る。並立世界からこの世界に呼び寄せる、という意味でな。滅茶苦茶な考えだが、今のこの学園で起きている『空間切除』

あるいは『空間固定』の解く鍵となる」

俺が息つくくと親父はお茶を飲み干しこちらに質問を投げかける。

「解く鍵・・・というともうお前はここから学園を元に戻せる方法を思い浮かんだ、ということだな？」

俺は頷くと親父は大きく笑う。

「そうか、んじゃ思う存分やれ！後のことは零、凜に任せる・・・俺はそいつの学園の入学と寮の配置とかの資料を作るからな・・・まかせたぞ黒己」

親父はそういうと見渡しながら全員の確認を取る。全員はそのばで頷いた。

第1章 第5 / 15部 〳 荒れる世界と学園生活 〳 〳 (後書き)

- - - - -
- - - - -
- - - - -

どうも、文才が皆無の Raja です。

アップが遅くなって申し訳ありません。・・・常連さんは居ないと
思います。もしいたのならばお詫び申し上げます。

さて、そろそろ滅茶苦茶な展開になってきました。・・・ふへえ。大
変だあ！！主にこんな小説を書く私の頭が！！！！

次回予告

恐らく脱出・・・そして学園生活へ

第1章 第5 / 15部 〳 荒れる世界と学園生活 4 〳

- - - - -
- - - - -
- - - - -

第1章 第6 / 15部 荒れる世界と学園生活4

「ということ、親父の許可が出たわけなんだが……うん、実際やるうとすることは結構すごいことなんだよな」

校長室を出ると俺は皆に向かってそう呟く……どうも神路魔 黒己です。

「実際には何をやるの？」

凜は歩きながら顔だけをこちらに向けこちらに問いかける。

「簡単に言えば、亀裂の入った場所を無理やり広げる感じかな？コイツが今回脱出の鍵になるんだが……まあ、無理だったら俺一人でもやれると思う。んで、凜にやってもらいたいのは、今回の事件の説明を生徒にして欲しい。放送で流したほうが一番手っ取り早いんで、もちろん

結構パニックとか、何かしらのことがあると思うから、零にそれを抑止してもらいたい。大体5分で終わると思うから皆にはそう伝えて欲しい

説明するときだけど、絶対俺の名前は出さないほうがいい。外部からの協力者、ってことにしておいてくれ」

二人はソレを聞くと同時に首を縦に振る。

「いいか、気合いれるよ？暴動とかなると今回の犯人の思う壺だからな。零、凜お前達を信用する」

「了解」「わかりました」

二人はそういうと各自の持ち場に小走りで駆けてゆく。さて、二人はいいんだが……。俺だよ問題は、コイツといっても読者の皆様には見えないか。

えつと現在、俺じゃなくて俺達なんだよ。あれだ、会話に入つてないからって登場してないとは限らないんだよな。どうでもいいか。

俺の右腕の袖をしっかりと握りながらこちらを見上げている少女。

名無しだからどう呼べばいいかわからん。恐らく今回の事件の一番の

被害者。少女A!!!。

「私の名前・・・レミア・・・レミア・フローレム」

少女がそう呟く・・・ああ、ご都合主義ですね。このタイミング・・・ちよつと恥ずかしいじゃないか。とは言え、うん。名前がわかったんなら

改めて紹介。

俺の右袖を力強く握っているレミア・フローレム。今回の事件の一番の被害者。恐らく軍から派生されてきている。髪は床につくほど長く

というか身長はよくても中学1年生にしか見えない彼女だが、顔立ちには・・・かなりよかつたりする。

10年前に潰した兵生産プロジェクト『子供兵器（child weapon）』の実験体だと思う。患者服みたいな袖からちよこちよこはみ出る腕には

注射器の跡が痛々しいほど残っている。それは俺の前に姿を見せるたびに怒りを思い出させた。

と、そんなことはどうでもいい。今は今の問題だ。

「レミア、お前の能力は『空間移動（teleport）』だけか？」

「・・・私の能力は空間移動じゃない、よ。『空間』そのものの操作をするの。・・・でも私これは魔術か魔法なのかもわからな、い・・・怖い」

レミアは俺の問いにまた震えだす。

自分の能力が怖い、か。昔を思い出させる光景。今回でラストにしないとな・・・被害者は多い・・・軍事機関、必ず尻尾を掴む。つと、険しい顔はやめて、緩めないとな。・・・よし。

「空間を操作。つと言うことは意外と亀裂を作るのは簡単だったりする？」

俺がそう質問すると首を縦に振り肯定する。・・・あれ？意外とすぐ終わるじゃないか。凜の放送が鳴り響く校舎の中で俺は呆気なさ

に戸惑いながらも

実行に移る。俺はレミアの背に合わせしゃがむ。

「それじゃ、少し頼みごと……していいか？」

「うん……」

「レミア、一度この空間に亀裂を入れて欲しい、空間の想像はお前に任せる。その亀裂を俺が拡大させて、ここから脱出する」

俺の答えにレミアは悲しい顔をしながら目を潤ませている。何故に！？え、ちょ、俺なにかしました！？

「……レミア？どうかした？」

「ここから、出たら私、どうなるの？」

なるほど、うん、ここから出たらね。まずは患者服を普通の服に着替えさせるな。俺なら。んで、髪を手入れして、思いつき遊んで疲れたら

落ちるように眠る。……そういう『普通』の生活をまずはさせよう。

「俺はお前を守るよ、そうだな、ここから出たら、まずは服とかでも買おうか、んで、髪の手入れや風呂に入ったり、それがすんだら遊んだり

楽しい生活をしようぜ……もう二度と、お前に人は殺させねえよ。

┌

レミアは泣いた。俺の胸に顔を埋めながら。そんな中放送は流れる。

……凜の奴流石だな。放送に対しても暴挙や発狂などもないし、
この生徒は

こういう事態に馴れているのか？……いや、零ががんばっているのか。……『俺達』もやらないとな。

「レミア、やろうぜ。とつとこの世界からおさらばだ、お前を使つた奴等に一泡吹かせようぜ」

「うん」

レミアは顔を上げるとすぐさま俺から少し離れた場所に手をかざす。ピシッ……この音が亀裂が入った合図。俺はすぐさま想像して……

空間を置き換える。

亀裂から漏れ出す『他の空間』を読み取り、それに置き換える。一瞬の浮遊感と共にガラスの砕け落ちる音が学園全体に響く。

激しい頭痛が俺を襲う。こういうことは馴れた・・・はずなんだがな。『鷹の目(hawk eye)』・・・懐かしい名前が頭をよぎる。

・・・いや、藤島見広・・・か。もう一度だけ会って話をしたいな。そんなことを考えながら、レミアの方に近づき頭をなでる。

「・・・よくやった。ありがとうな」

「うん、うん！」

レミアは二度頷くと俺に抱きつく。結構・・・甘えん坊だったりするのか？ま、いいか。

窓から学園の外を見る。そこはさっきの空間とは違うもの、人が道を往来しているのが見えた。作戦の成功を裏付ける光景だ。

「さて、もどるか・・・ツ。親父のところにいかねえとな・・・というか、展開早いな・・・。」

俺はそう呟きながら校長室にゆっくりと歩き出す。

パライイイン！！！！

不意に硝子の弾ける音が放送室で響く。凄く大きい音だったのか、耳が麻痺してしまっている。

「ッ！皆さん！大丈夫ですか！」

私は聞こえない自分の声を放送室のマイクに向けて発する・・・耳が痛い。恐らく黒己兄さんとあの子がやってくれたんだと思う。でも流石にあれだけ大きい音が出るのは私も聞いていない。私は校

長室に向かいながらなぜか胸を悔しい思いで一杯にした。

同時刻

「皆さん！大丈夫ですか！！？先程の音で鼓膜が破れた方の手当てを至急行ってください！！」

・・・僕自身鼓膜は破れてないものの耳の奥で音が反響するようにまだわずかに残響していた。「・・・っ！！」放送が鳴り響くのがわかるが、耳が麻痺しているため何も聞き取れない。おそらく僕と同じことを言っている妹だろうと考える。・・・僕はその場の収束をすると校長室に向かうため食堂を後にした。

「よお黒己・・・耳痛えぞ！！どうしてくれんだこれ！！」

校長室に入った瞬間の濁・・・は？わけがわからん。てか声大きいぞ。

「どうしたよ親父？」

「あっ！？なんだって？」

親父は耳に手を添えて大きく聞き返す・・・何があったんだ？老化か？置き換えに失敗して親父だけ老化したのか？

「兄さん！！バカ！耳が！」

「兄さん、・・・殺すぞ？」

は！？ちよっ、え？なんだなにかあった？！耳？？てか声でかいよ！零怖いよ！？

「レミア・・・説明プリーズ」

「多分だけどね、『空間』の置き換えの時にでた音が皆には大きく聞こえたんじゃないかな？」

「そうなのか・・・？」

「・・・えっ!?なんだって!?!?!」

なら納得はいくが・・・とりあえず今言いたいのは・・・全員声で
けえよ!うるせえ!!!

（30分後）

「あー、やっと戻ったわ・・・さて、黒己、ごくろうだった」

親父は耳を指でほじくりながら俺に向かってそーい放つ。校長室
は零と凜が出て行ったので現在親父とレミアと俺、3人である。

「そんなことより、レミアはどうするんだ？」

俺は俺の右腕の袖を力強く握る少女を指差す・・・いや、さっき聞
いたところ歳が一つ下だったことに驚いた。俺の180cmの身長
より明らかに20cm以上は低いくせに・・・凜と対して差はない
けど。

親父は一枚の資料を無言で俺に渡す。学生の詳細の資料だった。空
白欄はあったが、在籍クラスおよび、出身国、生年月日などの偽装
できる場所は全て埋めてあった。

「完成させて持って来い以上。あと、広すぎるお前の寮の部屋でそ
の子を保護しろよ?」

親父は資料に手をつけながら喋る。顔は真剣だったが声そのものは
落ち着いていた。

「元からそのつもりだ」

俺は短く答えると校長室を後にした。

「大尉!報告します!」

薄暗く巨大なディスプレイが光る部屋で一人の若い軍服の着た男性
が声を張り上げる。姿勢は背筋を伸ばしきり、手を後ろに組んで微

動だにしない。

「32号の脱走及び、『空間操作』の不可解なエラー発生のため、32号はまだ回収できておりません！『空間操作』はただいまエラーの修復のため使用できません！」

強大なディスプレイに移った老人の口元がにやけ顔から神妙になる。その顔をみた若い軍服の男性は少し脂汗をかきながら返答を待つ。沈黙が続く。

5分くらい経ったときに老人の口が開く。

「どれくらいで修復が可能だ？」

「2週間程です！」

「わかった、修復が終わり次第股報告しろ。以上だ」

低い声が鳴り響くとディスプレイの照明が切れ、部屋は暗い闇に変わった。

第1章 第7 / 15部 荒れる世界と学園生活5

あの事件から1週間の月日がたった。・・・短いと思った奴、その感覚が普通だから安心していいんだ。

それでだ、寮の部屋に住人と凶器が増えた。

住人の名前はチェーンソー・・・じゃなくてレミア。前は患者服のようなものを着ていたのだが、今は凜が選んだ歳相応の服を着ている。現在レミアは俺のベットで就寝中。・・・もぞもぞとたまに動き、寢息を「スー・・・スー」と立てながら幸せそうな顔で寝ている。んー平和だ。んで増えた凶器はレミアの可愛さ・・・ではなくベットの近くの棚に立てかけてあるチェーンソー。

実際に調べてみたところ。回転数は通常のチェーンソー15500rpmだとするとこの刃がダイヤモンドでコーティングされているこのチェーンソーは25000rpm（単位rpmの計算法1 / 1min、つまり15500だとすれば1分間に15500回転・・・だったかな？）・・・コレに刻まれた背中への傷は跡形も無くなっている。改めて自分が規格外だと思い出させた。

呪い、・・・いや特徴といったほうが言い方としては正しいかもしれん。物心がついた頃から俺の体は傷がつかなかった。いや、つくにはつくんだが

毎秒腕一本の速度で再生する。そのためか、周りからは化け物だとか最終兵器だとか言われほうだいだ。恐らく今も何処かで言われているのかもしれない。

ま、そんなことはどうでもいい。そんなチェーンソーを使っていたレミアの腕にあった注射器の跡は消させてもらった。今は普通のどこにでも居る

女の子として生活できている。・・・いいことだ。そして、彼女も学園メシスに本日編入することになっている。夏休み終わって今日

は始業式・・・ハア、憂鬱だわ。

俺はどちらかという交流群るのが好きなほうでは無い。どちらかというと苦手だ。

デジタル時計がAM6:55を表記している。そろそろお姫様が起きる頃だ。

「ん？んう？・・・おはよう・・・くるお」

寝ぼけながらベットからもそもそと起き上がる。服装は俺のYシャツのみ、幼い体つきのせいサイズがぶかぶかである。

レミアが俺に抱きついて胸に顔をこすり付ける。一緒に暮らしてきたわかつたのだが心許した相手にはかなり甘えん坊になったりする。最初この部屋に移住してきたときはかなり警戒されていたんだが、2日間くらい経つと今の状態に。凜とは服とかの買い物ときに親友の仲になつたり、零とはまだ打ち解けてないかな？

ま、そんなこんなでやっと落ち着いて学園生活というものを送れるわけだ。さて、朝飯の準備してとつと親父のとこ行くか・・・

「スー・・・スー・・・」

「レミアっ！お前！人の体で寝てるんじゃない！」

俺はレミアを起こして剥がすと色々な準備を始めた。

「みひろおおお！」

朝早くの教室で聞き覚えのある声が響き渡る。・・・騒がしい。

「うるさい・・・」

「え、あ。ゴメン、」

彼女は私の親友で青井 京。このクラスのムードメーカー的な存在。彼女談では私とは対照的な性格で気はある意味合っているらしい。

「で？なに？」

私は読んでいた本を閉じると彼女の顔を見ながら問う。彼女は落ち

込んでいた顔を一瞬で明るい笑顔に変えると嬉しそうに語りだす。

「実は今日このクラスに・・・編入生が二人来るらしい!!!!」

「えっ・・・!?!」

私は目を見開いた。このクラスに二人・・・?しかも2学期早々に?おかしい話だ。このクラスに編入事態が珍しいのに。どこかのお金持ちのお坊ちやま、とかかな。

「その編入生の名前は・・・??」

「えっとたしか、レミア・フローレルっていう女の子と、あとは凜ちゃんのお兄さんらしいの。校門で見かけてから後ろから追って、校長室で

盗み聞きしたから間違いないと思う。でも凜ちゃんのお兄さんって零さん以外いたっけ?私聞いたこと無いけど」

私はそれを聞いて呆れ顔をせずにはいられなかった。

「またアナタはそんなことをしてたの・・・?」

でも確かにレナの言うとおり生徒会長の兄弟は零さんしか居ないと聞いたことがるけど・・・義理の兄かしら、わからない・・・。

私が思考を始めた瞬間に、学園に放送が掛かる。始業式のための講堂に集合の合図。

謎の転校生。そして・・・1週間前の出来事。

「どうでもいいか」

「ん?」

「いこう・・・」

私達は教室から流れ出る生徒の波に乗って講堂に向かった。

現在俺、神路魔黒己は校長室で応接用のソファに体重を預けながらお茶を飲んでおります。親父は始業式で居ないため、俺とレミア二人でだらけております。

「くろお。暇あ〜」

レミアが俺の脚を枕代わりにしながらソファで寝転がって俺の方に顔を向けながら話しかけてくる。・・・確かに暇だけでもさ。年頃の男に何をしてるんだコイツは。

警戒心の欠片もないな。1週間前のコイツに見せてやりたいね・・・。

「多分あと5分くらいで親父帰ってくるから、少しまとうな」

俺はレミアの頭を撫でながらそう答える。レミアは目を細くしながら気持ちよさそうに目を細め、脱力状態になっている。猫かこいつは！

7分間だらけていると、相変わらず資料の多い校長室の主が顔を出す。にやけ顔がうざいなと思いつつ、スーツ姿が地味に似合っていることに感心する。

「黒己、お前のクラスに行くぞ、ってレミア寝てないか？」

「ねてないよお」

親父の問いかけにレミアは起き上がりながら手を上げてひらひらさせている。

「あゝ、うん。親父アリガトな、スーツ姿地味に似合ってるぜ」

「ツケ、どうでもいいわ。お前にほめてもらっくらいならレミアちゃんに褒めてもらった方が100倍ましだ」

親父は笑いながら俺とレミアを引きつれ廊下を歩く。見かける教室は中々生徒でにぎわっていて、笑い声と楽しそうな雰囲気になぜか圧倒されそうになる。

レミアはなぜか明るい顔で楽しみにしながら見てたけどな・・・人見知りの癖に。

親父の後ろを歩いて2分くらいで特化Eクラスの前に来ることができた。・・・俺が学園生なんてまだ実感ねえな。

「さて、黒己、レミア。お前の新しい人生のスタート地点だ。大袈裟と思ったその黒髪、お前は少し緊張しすぎだ。リラックスしろ。あと、お前ら二人に改めて言うが、

余り本気で実技とかやると、けが人出るからそこら辺の調整は各自

やってくれ。・・・では、先に入るから呼んだら来る様に」

心臓が高鳴る・・・わけでもなく。いつもの俺のやる気の無い顔で親父が教室に入るのを見届ける。今日ばかりは親父に感謝しないと。な。

緊張が解け、いつもの俺とレミア。親父が談笑したあと、俺とレミアの名前を呼ぶ。・・・俺は教室の扉に手を掛け力を入れて開ける。中に入ると、かなりの視線を感じるが気にしないように俺は親父の隣に立つ。レミアは・・・誰に手をふってんだ？親父はレミアを見て苦笑いすると

俺達二人の紹介を始める。

「あゝ、さつきも話したように、こいつら10年前の事件の被害者だ。皆、仲良くしてやってくれ。いや、この黒髪は基本的に相手に来るまで

何もしないタイプだから皆の方から積極的に行って欲しい。黒己、黒板に自分の名前とレミアの名前を・・・綺麗に書け」

ツク。コイツ・・・一々要らねえことばかり言いやがって。心で呟きながら。俺は自分の名前とレミアの名前を書く。

俺が書き終わると教室がざわめきだす。え！？そんなに字汚いか！？「お前等、静かにしろ。言いたいことは後でコイツに質問する時間とかできるだろうから、今は静かにしろ」

俺を指差しながらそう生徒達に答える。・・・親父さん、俺何かしました？

教室はざわめきながらも、親父の喋る言葉をしつかり聞き取っている。10年前の事件というのは語察しのどおり『子供兵器（child weapon）』のことである。

このクラスの8割はその場にいた被害者であった子供。記憶の大半は一部の人間を除き『学園側』で処理しているらしい。ついでに、俺は記憶のその処理は受けてない。

「というわけで・・・転入生の質問コーナーに移りたいと思う！！」

教室がイツキに熱気を帯びた出す・・・え？ちよつと？皆さん少し
落ち着いてくれませんかねええええ！！！！？

この学園で楽しい生活を送れそうな・・・そんな日常が目の前にあ
った。

第1章 第7 / 15部〜荒れる世界と学園生活5〜（後書き）

.....

どうも、ただの高校生のR a j a & Yです。
さてさて、やっと書きたいところに発展していく物語。やっぱり楽しい雰囲気を書くほうが気分がいいものです。

*感想の受付をユーザのみから制限なしに変更しました。皆様の感想お待ちしております。指摘もほしいかな

次回予告

騒がしい学園生活、楽しい日常編・・・

第1章 第8 / 15部〜騒がしき学園生活と非日常1〜

.....

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7057z/>

特徴特化魔術師

2012年1月7日00時52分発行